

がん患者や家族が医療だけでなく漠然とした不安についても気軽に相談できる「マギーズ東京」が話題を呼んでいる。その共同代表理事を務めるのが、日本テレビの記者兼キャスターの鈴木美穂さん。自身も24歳の時に乳がんを患った際の経験をもとに、多方面で発信を続けている。

# maggie's

高橋教授の  
この人に  
会いたい

Vol.2 鈴木美穂氏

納得でできる医療の受け方と  
メディアの役割を考える

## 高橋 泰 Tai Takahashi

国際医療福祉大学医療福祉学部長・教授  
たかはし・たい●1986年、金沢大学医学部卒業。同年、東京大学病院第1第3第2内科・麻酔科で研修。92年、同大学医学系大学院医学博士課程修了(医学博士)後、米国スタンフォード大学に留学。94年、ハーバード大学公衆衛生校に武見フェローとして留学。97年4月より国際医療福祉大学医療福祉学部医療経営管理学科教授、2009年から同大学院教授、16年より同大学医療福祉学部長・教授。

## 鈴木美穂 Miho Suzuki

日本テレビ報道記者兼キャスター兼  
社長室CSR事務局 NPO法人マギーズ  
東京・共同代表理事  
すずき・みほ●2006年に日本テレビ入社後、報道局に所属し記者として活動。17年から社会部記者と兼任して『スッキリ!!』『情報ライブ ミヤネ屋』のニュースコーナーを担当。社長室CSR事務局兼務。08年に乳がんを経験したことから、本業の傍らがん患者を応援する活動に従事。09年、若年性がん患者団体「STAND UP!!」を発足。16年、がんに影響を受けた全ての人が無料で利用できる「マギーズ東京」を東京都江東区にオープンさせた。

## 頭が混乱している時に 気軽に訪問できる場所

**高橋** 鈴木美穂さんは日本テレビの記者、キャスターであると同時にNPO法人マギーズ東京の代表理事も務めています。まずマギーズ設立の経緯からうかがえますか。

**鈴木** もともと私は学生時代からバックパッカーとして30カ国以上回ったり、自転車で日本列島縦断に挑戦したりと「元気印」がセールスポイントで、日本テレビに入社した後も記者として「夜討ち朝駆け」の日々を送っていました。

ところが2008年、24歳の時に乳がんがステージ3で見つかり、それまでの生活が一変しました。初めて告げられた時は正直、「これで死ぬのか」と思いつめたほどです。

ただ救われたのは、休職を告げたら取材先で知り合った方々や局のスタッフがいろいろな先生を紹介してくれて、6人からセカンドオピニオンを聞いたこと。結果的

に全部摘出しましたが、化学療法をはじめいろいろな選択肢と比較検討し、納得したうえで手術に踏み切ることができました。

主治医にも恵まれました。他の先生が「将来のことよりも早く手術しましょう」と言うのに対して、この先生は若年性乳がんを克服して結婚、出産した方々の写真を見せてくれて「治った後のことも考えて治療内容を決めたほうがいい。これから先の人生も諦めないでほしい」と言ってくれたのです。ベルトコンベアのようにマニュアル通りに処置を決めるのではなく、私の将来も見据えた選択と一緒に考えてくれたのです。

**高橋** 鈴木さん自身が治療に臨む際に得られたさまざまな情報、選択肢、助言などを、他の人も得られるような機会を設けたいと。

**鈴木** 病気を告げられて頭が混乱している時に、一緒に選択肢を探したり、検討したりできる専門家が傍らにすることはとても大事です。私自身、何が悩みか、わからないくらい悩みましたし、そのなかには冷静に考えればかなり怪し

い民間療法も頭にちらつきました。そんな時に気軽に相談しに來られる場があるといいなと思ったのです。

私は記者という仕事柄、さまざまな分野の人とつながりを持ってたし、その縁でたくさんの方の医師の意見を聞ける機会になりましたが、皆がそうした境遇にあるわけではありません。現に抗がん剤治療の結果、不妊になり、後悔している若いがん患者はたくさんいます。そういう人たちのためにも情報発信をしたいと考え、復職した後もがん患者向けフリーペーパーの発刊など患者支援活動をするようになりました。

その活動のなかで、イギリスに、がん患者だけでなく家族も治療内容はもちろん、いろいろな不安を聞いたり相談に乗ったりしてくれる「マギーズ」という施設があることを知ったのです。ただ、記者と掛け持ちでしたからすぐには見学に行けず、調べているうちに、暮らしの保健室を運営している訪問看護師の秋山正子さんと知り合

いました。話を聞くと、日本にも

導入したいと考えて5年間も活動していたというのです。医療職などの専門家は集まっているけれど場所やお金の確保が課題だということで、クラウドファンディングでお金を募り、学生時代の友人に土地を確保してもらって一気に立ち上げました。

**高橋** 鈴木さんとは知り合ってからほどになりますが、昨年、久しぶりに会ったらマギーズ設立の必要性を力説していました。その迫力に圧倒され、寄付金をカンパしたのを覚えています(笑)。

## 「医療」の正しい情報を、 関心のない人にも届ける

**高橋** もう一つの顔である、テレビ記者兼キャスターとしての鈴木さんのお話も伺いたいと思います。復職後は厚生労働省も担当されました。

**鈴木** 自分が病気を患ったこともあり、がん治療の過程で得た経験を伝えたいと考えていましたし、日本の医療政策にも関心を持ったので、職場復帰してからはずっと



「医療担当」の希望願いを出して  
いました。復職から5年経った14  
年にやっと念願が叶って、厚労省  
担当に配属されたのです。

**高橋** 実際に担当して、厚労省は  
どのように映りましたか。

**鈴木** 私はがん患者としての視点  
から医療政策を見ていたのです  
が、記者として取材すると、いろ  
いろな難病対策が求められ、社会  
保障全般に視野を広げれば医療だ  
けでなく年金、介護もあります。  
そうしたさまざまな課題を、バラ  
ンスを取りながら政策として具現

化している印象が強いです。その  
せいもあって、何をやっても褒め  
てもらえていない(笑)。

しかも、それらの政策によって  
生まれた行政サービスが、必ずし  
も広く知られているわけではない  
のです。よほど関心を持った人で  
ないかぎり、厚労行政や医療に関  
することに耳を傾けることはあり  
ません。それだけに、どう伝える  
かはとても重要です。

**高橋** 近年はSNSなども普及  
し、関心のある人はかなり専門性  
の高い情報入手できるような

りましたが、逆に言えば関心を持  
たない限りそうした情報に触れる  
ことはありません。

**鈴木** その意味では、テレビメ  
ディアのもつ可能性はとても大き  
いと考えています。テレビは専門  
ではない人、関心のない人に対し  
ても情報を届けられる、いろいろ  
な「ひっかかり」を持った性質の  
媒体でもあると言えます。たとえ  
ばタレントさんが医療問題を語れ  
ば、タレントさんを目当てに視聴  
した人にも、医療問題は伝わりま  
す。テレビ局は、そうした「見せ

## 「当事者」であるだけに 「伝える情報の質」には 敏感になりました

—— 渋谷



## 関心を持たない限り そうした医療情報に 触れることはありません

—— 高橋

方のプロ」の集団です。関心のない人たちにも振り向いてもらうためにも、テレビメディアは有効活用すべきだと思います。

**高橋** ご自身が病气されて、取材を受ける立場にもなりました。メディアへの見方は変わりましたか。

**鈴木** 特に医療問題は私自身も「当事者」であるだけに、「伝える情報の質」には敏感になりました。たとえばテレビに出て発言する人のなかには、かなり偏った考え方を持っていることもあります。そ

の内容が繰り返し返し放映されると、世の中には、それが「医療界の一般的な認識」と受け止められかねませんし、ひいては医療に対する理解をゆがめることにつながってしまいます。

そこで、私が厚労省担当の時に、日本テレビでは医療者に出演していただく場合、がん関連の人選だったら私にまず相談する、他の医療問題を扱う場合は厚労省担当の記者に出演者について意見を聞くという仕組みを取り入れました。

**高橋** 私自身も医療問題などでマスコミからコメントを求められることがあるのですが、こちらの意図するところを汲んでくれず、断片的に使われてとても驚いたことがあります。そうした経験をもつ立場からも、マスコミの発信の仕方には注目したいです。

医療問題の当事者であり、かつそれを伝えるメディアの一員でもある鈴木さんのお取り組みは医療のあり方に新たな投げかけをもたらすそうですね。本日はありがとうございました。